

大学における初習外国語教育の意義について

—ドイツ語科目を例にして—

武 田 修 志

1

わが鳥取大学において教養部が廃止されたのは、今からちょうど10年前の平成7年(1995年)のことである。この年を挟んで前後2, 3年の間に、日本のほぼすべての大学から教養部がその姿を消した。そして、この大学を襲った大波の、いわば余波のような形で、初習外国語(第2外国語)不要論や単位削減案が至るところで議論の対象となり、多くの大学でそれが実行された。この議論は、外国語としては、これを使えるようになるために英語1つでよい、あるいは、最近の大学生の学習意欲、学習能力から判断して、英語1つで精一杯である、あるいはまた、中国語や韓国語は充実させる必要があるかもしれないが、もうドイツ語やフランス語は縮小してよいはずだ等々、いろいろな言い方でなされた。

わが鳥取大学においても、初習外国語不要論あるいは削減案を説いたり、支持したりした教師や学生の数は相当の割合で存在し、年を追って漸次その主張を実現してきた。たとえば、医学部医学科の学生には、教養部廃止の年にはまだ6単位の初習外国語の単位取得が義務付けられていたが、平成10年度入学の学生からは、4単位ということになり、そしていよいよ、今年、平成17年度入学の学生からは、わずかに2単位ということになってしまった。医学部以外の他学部においては、いまだ初習外国語の単位は、4単位必修が標準と言ってよいが、それでも、「上級英語」あるいは第3外国語を履修した学生は、第2外国語は2単位のみで卒業単位を満たせるのであるから、今や、実質的にはわが大学のすべての学部において、「初習外国語2単位時代」を迎えていると言ってよいであろう。

さて、取得しなければならない単位が2単位であるというのは、改めて言うまでもないことだが、90分間の授業を週1回、年間30回受講して終り、ということである。わずかにこれだけの時間で、意義ある外国語の授業が本当にできるものであろうか。ここまで初習外国語の時間を削減されては、もはやどんな工夫も情熱も、意義ある授業を作り出すことはできないのではないか……

我々初習外国語担当者は、我々の方から授業を放棄しない限り、この疑問に答える責務があるであろう。

2

筆者は自分の担当する初級ドイツ語のクラスにおいて、例年、5月から6月にかけての頃、「ドイツ語学習の意義」というテーマで2, 30分話をすることにしている。連休が

終り、新1年生にとって大学生活の新鮮さがいささか色褪せてきて、「なんでドイツ語（第2外国語）なんかやらなきゃいけないんだ」と言い出す者が現れてくる時期である。そういう「ドイツ語（第2外国語）なんて不必要」という顕在、潜在の声に対して、一つ答を与える形で話をするわけである。

昨年度のその折の授業メモを見ると、まず第1に「ドイツあるいはヨーロッパへの関心を高める」と書かれている。筆者はドイツ語の文法や表現の学習をする合間に、ドイツ語圏についての簡単な国情の紹介をプリントやビデオを使ってやっているが、ドイツ語やドイツ事情を知ることによって、ドイツあるいはヨーロッパへの関心を高めるということを、ドイツ語初級の最も大切な授業目的と考えているわけである。

では、何故にドイツあるいはヨーロッパへの関心を高めることが、大学生にとって「選択必修科目」としてドイツ語を学ばなければならないほどに大事なことになるのか。それは、一教室での筆者の説明をそのまま繰り返せば一現代の先進文明世界は、良くも悪しくも、北アメリカ、ヨーロッパ、日本の3局によってリードされ、動かされている、その3局の1つであるヨーロッパ（とその中核国であるドイツ）に関して、大学生は完全な無知であってはならないからだ、ということになる。

こういう説明が受講生にとってどれほどの説得力を持っているかは、無論、疑問の余地がある。ただ筆者自身の経験の範囲内で言えば、それなりの説得力はあるように思える。筆者は毎時間、授業開始後すぐにメモ用紙を配り、その日の授業に関する質問や感想を書かせ、提出させるということをやっているが、この説明をするまでは、どのクラスでも「なぜドイツ語（第2外国語）を勉強する必要があるのか」といった質問や不満めいた言葉を、そのメモ用紙に書き付ける受講生がいるのに対して、この説明のあとではそういうことを書く学生はほとんどいなくなるからである。「現在の世界情勢の中で、ドイツあるいはヨーロッパについて知ることは、それなりに大事なことだ」という説明をすべての受講生が納得して、その後は一生懸命ドイツ語の学習に取り組むというわけではないが、「自分たちは全く無意味にドイツ語を強制されているのではない、むしろ大事な勉強をしているのだ」という気には多少なるようなのである。

現在の大量化した大学の中でも、ドイツ語教育の意義として、現代の先進文明世界をリードする3大地域の1つ、ヨーロッパへ、学生の関心を向けるということがあるのではないかということ述べたつもりであるが、ここで大事なことは、こういうふうにドイツ語（初習外国語）教育の意義を具体的に何に求めるかということと同時に、それが何に求められるにしろ、授業開講後の間もない時期に、担当教師が、自分の考える授業の意義を受講者の前で明確に述べる—このことではないかと思われる。かつてはほとんど無条件でドイツ語の授業を受け入れていた医学部の学生からすら、今では、「いったいどうしてドイツ語なんか半強制的にやらされるのか」というドイツ語授業否定の声が聞こえてくる。まして、工学部や農学部のクラスにおいては、この声は一潜在的には一さらに大きいと言ってよいであろう。この声に誠実に答えることなくして、友好的な雰囲気の中で活気ある授業展開はできないのではなかろうか。しかし、現実には、こういうドイツ語授業否定の声を無視して、どんな自分の考えも語ることなく授業を進めている教師は、今も少なくないように思われるのである。

3

ここで、特にドイツ語ということではなく、現在の日本の大衆化した大学で、第1外国語の位置を占めている英語のほかに、もう1つ外国語を学ぶことにはどういう意味があるのかという点について、少し考えておきたい。

戦前のわが国では、ほぼすべての大学生は、入学以前に（旧制）高校において少なくとも2つの外国語を学習した経験を持っていた。これは、当時においては、大学で「学問」をするには、少なくとも2つの外国語の知識が是非とも必要であると考えられていたということであろう。すなわち、当時は、第2外国語も、現在の英語と同じように、「実用」のために学ばれたのであり、そこでは第2外国語を学ぶ意義を疑問視することは、ほとんどなかったのではないかと思われる。

戦後の新制大学において、「第2外国語までは学術語として必要」というこの考えが、いつまで通用していたかを正確に言うことは難しいであろうが、およそのところを推測してみると、昭和40年代前半（1960年代後半）までは、まだこの考えはある程度有効であったと見ていいのではなかろうか。それというのも、昭和44年（1969年）に大学に入学した筆者自身の見聞の範囲内のことではあるが、通常8単位であった初習外国語を、必修として勉強することに疑問を抱く大学生は、当時はまだ、ほとんどいなかったように思い出されるからである。

しかし、昭和40年代の後半（1970年代前半）、工学部を中心にしたいわゆる実学系の教師から、「身に付かず、かつ、必要でもない」初習外国語の単位は削減すべしという声があがって、たとえば筆者が昭和50年（1975年）に鳥取大学でドイツ語教師を始めたときには、工学部、教育学部、農学部（獣医学科を除く）においては、初習外国語の単位はすでに4単位に削減されていた。

ちょうどその頃、大学内のみならずジャーナリズムでも、日本人の外国語学習について、「実用か教養か」ということで、激しく議論された⁽¹⁾。そして、それから更に4半世紀後、1990年代の後半になって、再び「実用」として役に立たない初習外国語は廃止または削減すべしという声が高まったわけである。このたびの特徴は、前回の昭和50年代の外国語学習論争時とは異なり、いわゆる「教養派」の反論が、ほとんどどこからも上がらなかったことであろう。つまり、外国語は「実用」になり得なくとも、「教養」として学ぶべきだという主張する者は、もはやどこにもいないように思われたのである。そして、言うまでもなく、我々は今も引き続きこの状況の中にいる。

こういう状況の中で、筆者自身は初習外国語としてドイツ語を学ぶ意義として、「世界をよりこまやかに理解する」という、多少「教養的」な目的を学生に対して提示している。「世界をよりこまやかに理解する」というのは、たとえば「外国語」といえば英語のごときものと理解していたのを、そこにドイツ語という幾分英語とは異なる外国語を具体的に学ぶことで、外国語イコール英語という理解を壊し、「外国語」というもののイメージをよりこまやかにしていく、ということである。あるいはまた、日本とドイツの教育制度を簡単に比較し、その違いを知ることによって、自国の教育制度を見る目をよりこまやかにするというようなことである。第2外国語の学習目的として、このような「世界をよりこまやかに理解する」というような教養的意義は、言うまでもなく、知的に高級な事柄であり、最近の大衆化した学生の理解の外にあるように思われるが、筆者の経験しているところ

ろでは、「まさにそういう高級なことをやるのが大学ではないのか」と学生に説明すると、彼らは案外素直に聞き入れてくれるように感じ取られるのである。

4

さて、現在の大衆化された大学において、いわゆる一般教養の枠内にあるドイツ語（初習外国語）を、週1回1年間学ぶ意義として、

- (1) ドイツあるいはヨーロッパへの関心を高める
- (2) 世界をよりこまやかに理解する

という2つの「学習目的」を上げてみた。このほかにも、たとえば「青年期における意識的・自覚的な外国語学習による人間形成」といったことを、ドイツ語（初習外国語）学習の意義として考えることができるかと思うが、しかし、すでに初習外国語担当教師なら誰でも察しているように、筆者がここに上げた若干の「学習目的」にしろ、その他考えられるであろう何らかの意義にしろ、今の日本の大学あるいは大学生を取り巻く状況において、英語以外にドイツ語を、あるいは、そのほかの外国語を、第2外国語としてすべての学生が必ず学ばなければならない理由は、見つけることができないのではなかろうか。

事実、そういう理由があったのであれば、この10年来、ほとんどすべての大学において初習外国語単位削減の措置が取られた際に、その理由を抛り所にして、それなりの「抵抗」が試みられたはずであろう。しかし、周知のように、そういうことはほとんどどの大学でも行われなかった。

では、今や初習外国語を学ぶ決定的な意義はなくなったので、一部の教員、一部の学生が主張し続けているように、これを廃止すべきであろうか。

しかしながら、筆者はそういうふうには考えていない。ドイツ語（初習外国語）を学ぶ意義は、それほど説得力のあるものではないかもしれないが、上にあげたように、きちんとした内容のものが幾つかある。大学で初習外国語を教える理由としては、この程度のものがあれば、さしあたりは十分ではなかろうか。

むしろ、いっそう大事なことは、この、学ぶに決定的な理由のない初習外国語を教える教師の工夫であり、教師としての情熱ではなかろうか。言葉を換えていえば、今、初習外国語という科目は、大衆化した大学生にとって、それを教える教師が精一杯の工夫と情熱を持って教えれば、学んでよかったということになる、しかし、教師が工夫を怠り、情熱を欠いていれば、学ぶ必要のないものを無理矢理学ばされたということになる—そんな、いわば「必要」と「不必要」の境界線上にある科目であるように、筆者には思われるのである。

ここで、我々教師もかつて大学生として体験した、語学の時間と言え、まず文法の説明を一通り行い、あとは学生に練習問題をやらせるか、訳読をする—そういう従来の教え方によるドイツ語の授業が、最近の大学生にとってなぜ魅力のないものになってしまったのかを、改めて考えてみる必要がある。

よく言われるように、大学生の全体的な知的レベル、「教養」のレベルが下がってしまったということが、確かに、根底にあるように思われる。それというのも、たとえば、30数年前に教養部で初めて初習外国語を習った筆者の時代においても、すでに熱心に初習外国語まで勉強する学生は少数であったが、それでも、初習外国語の必修単位が第1外

国語（英語）と同じく 8 単位と定められていたことに、大多数の学生がさしたる疑問も抱かなかったというのは、大学生というものは外国語の 2 つくらいはきちんと学ぶものだと理解していた、つまり、その程度の知的レベルは当時の大学生は保っていたと言えそうだからである。

しかしながら、それ以上に初習外国語を学ぶ学生の態度を大きく変化させたものは、おそらく次の事態であろう。すなわち、先にも少し触れたように、およそ昭和 40 年代前半（1960 年代後半）くらいまでの大学生にとっては、初習外国語は、それを将来使うにしろ使わないにしろ、漠然とながらも、学術語として必要だと受け取られていたということである。これは、最近の大学生の大多数には全くあてはまらない事柄である。つまり、かつて初習外国語は、大多数の学生にとって「学問」をする「手段」だったのである。自分の専門をより広く、より深く、より正確に究めていく「道具」だったのである。現実にもそうであったかどうかは別にして、少なくともそういうふうには理解されていたのである。ということは、そういう初習外国語の授業も、そこにおいて、とにもかくにも文献が読めるように、きちんと文法なり発音なりを教えてくれれば、特にどんな工夫をこらして教えてもらわなくても、全く無意味とは言えなかったということである。

しかるに、今は初習外国語の授業は、学生が自分の専門の勉強をするための「手段」を学ぶ場では全くない。これは今更言うまでもないことである。しかし、この現実の事態を、目を逸らさずに正面から見据えることは、我々初習外国語担当の教師には、けっして易しいことではないのである。それというのも、我々の多くが、相も変わらず、あたかも学問をする「手段としての第 2 外国語」をマスターするのが目的でもあるかのように、教え方も旧来のやり方そのまま、退屈な授業を繰り返しているからである。

我々は今や初習外国語の授業目的に関して、考え方を一新しなければならないのではなからうか。そして、その新しい考え方の 1 つとして、初習外国語の授業を、「学問するための手段や道具をマスターする機会」と理解するのではなく、この授業自体が学生にとって勉学の「目的そのもの」、ここで学ぶことを勉学の「最終目的」とみなす—そのような考え方を筆者は提案してみたいのである。

5

その授業内容が大学生の勉学の最終目的であるような初習外国語の授業—それがどういうものになるかは、教師各人の考え方によって少しずつ異なるであろう。筆者は、以下において自分の場合を多少具体的に紹介してみようと思うが、その前に、なぜこのような考え方が是非必要であるかを、ここで改めて述べておきたい。

最初に触れたように、現在の日本の過半の大学においては、わが鳥取大学においてそうであるように、初習外国語を選択必修として学ぶ機会は、週 1 回（多くて 2 回）90 分、1 年間のみ（長くて 2 年）であり、大多数の学生は、そののち初習外国語を勉強する機会を、生涯持たない可能性が高いのである。換言すれば、現在初習外国語を学んでいる学生の大多数にとって、大学入学後すぐの初級クラスの授業は、初習外国語学習の開始であると同時にその終りなのである。この条件、この現実こそ、私が初習外国語の授業を、それを学ぶことが「最終目的」であるような内容にすべきであるとする第 1 の理由である。

更に、筆者が初習外国語の授業を「最終目的」とするよう工夫すべしと考える理由を、

ここでもう一つ述べておきたい。それは、初習外国語に限らず、大学における授業はすべて、もう少し、その科目そのものの学習が、大学における勉学の最終目的であるようにすべきではないかとの考えに由来するものである。そして、この考えは何よりも、現在の中学校や高等学校における勉学が、あまりに何かの手段になり果てていることに対する強い反省に基づくものである。たとえば、文系学部へ進学する高校生にとって、数学の授業は、大学受験に必要という観点から教えられている場合がほとんどではなかろうか。しかし、本当はもっと「そもそも数学とは何であるか」を理解する、「数学のおもしろさ」を味わう—そういった観点から学ばれるべきであろう。もちろん、文系学生にとっての「数学」に限ったことではない。ほとんどあらゆる科目が、現在の日本においては「何かのために」、つまり、何かの手段として学ばれている。これでは勉学というものの持つ本来のおもしろさを味わうことは難しいのではなかろうか。もう少し、勉強するというそのこと自体のおもしろさを味わうために、1つ1つの科目を、その内容そのものが、勉学の最終目的というふうを考えるべきであろう。

さて、先に筆者は、初級ドイツ語の授業の最も大事な学習目標として「ドイツあるいはヨーロッパへの関心を高める」ということを挙げたが、しかし、授業時間の3分の2は、この学習目標とは直接関わりなく、発音の練習、初級文法の説明とその練習問題、表現の練習といった、外国語学習の第1歩としてどんな授業においても必ずやらなければならないことをやっている。ただ、いつも、10人の受講者のうち少なくとも9人にとっては、この授業がドイツ語学習の始めであり終わりだということを前提にしているので、たとえば、発音にはかなり力を入れている。なぜなら、ある外国語を1年間勉強したことの最も明確で具体的な意味は、その外国語の文字を見て発音することができるということであろうと考えているからである。それ故、発音練習は学習開始の時期だけではなく、1年を通じて、折を見て繰り返し行っている。ドイツ語の歌を覚えるということ、この7、8年来やっているが、これも発音練習の一環とみなしているわけである。

発音練習や文法理解のための例文として、ドイツのことわざや箴言を使うというのも、地味だが意味のある工夫のように思われる。なぜなら、ことわざや箴言には、それを読み、発音し、理解するだけでも、学習の「最終目的」となるような、内容豊かな名言が多いからである。ゲーテの『ファウスト』中にある、有名なセリフ、

Es irrt der Mensch, solange' er strebt. ⁽²⁾

(人間は努力する限り迷うものだ。)

を、喜ばない学生は少ないように思われる。

では次に、筆者の初級ドイツ語の授業目的—「ドイツあるいはヨーロッパへの関心を高める」—に直接寄与することでは、どういうことをやっているかと言えば、まず第1に「ドイツ戦後史」と題して、ベルリンの壁崩壊へ至る経緯を簡単に説明し、同時に、その内容に沿ったビデオを見せたり、EU成立までの戦後の独仏間の歴史を、プリント一枚にまとめて説明したり、ドイツの環境問題への取り組みの様子、あるいは、旧東独のシュタージ問題等に関する特集番組のビデオを見せて、合わせてこれらの問題に関する本を紹介したりしている。また時には、ドイツ文学の名作を紹介したり、ドイツ・リートを日本の「歌曲」と比較して聞いてみたりしている。

さて、こういうドイツ語の語学的内容とドイツに関するいわば文化的インフォメーションとを、限られた時間内に同時に上手にこなしていくには、我々教師の本当に捨て身になってする工夫が不可欠である。誰にでも分かることだが、最近の、さほど初習外国語の勉強に熱心でない過半の学生に、初級文法のすべての項目を一通り教えるだけでも、実のところ、おそらく週 2 回 1 年間全部の時間が必要であろう。その上、ドイツ事情案内をやるうというのであるから、形容詞の語尾変化、受動態、接続法等は省略するといった文法事項の精選は当然のこととして⁽³⁾、更に、文法事項をより理解しやすいものにしたたり、発音や表現練習をスムーズに行うことができるようなプリントの作成、学生への適切な指示といったものが絶対に必要であろう。また、我々ドイツ語教師の大多数が文学研究者か文法学者であるので、我々にとって、ドイツ史はともかく、ドイツの環境問題への取り組み、シュタージ問題への精通、EU 拡大の経緯と今後のヨーロッパ情勢の行方といったことについて、一通りの知識を持つことは、少なくとも筆者のような文学書を読んでいるときが一番幸せというような人間にとっては、本当に必死の努力なくしては不可能である。しかし、初習外国語を取り巻く現在の状況下では、こういう、我々の全身全霊を捧げてする授業のみが、わずかに、「選択必修」の「初習外国語」として、その存在を許されるのではなかろうか。言葉を換えていえば、我々初習外国語担当教師は、初級クラスの授業をあくまでも「必修科目」の 1 つとして教えていこうとする限り、その当然の責務として、自分の授業を意味豊かなものにする限りない工夫と情熱を欠いてはならないということである。

注

(1) 平泉渉／渡部昇一『英語教育大論争』(文藝春秋社, 1975年) 参照。

(2) Goethe : Faust I (Johann Wolfgang von Goethe Werke Kommentare und Register Hamburger Ausgabe Band 3) S. 317

(3) 山本洋一「外国語授業の構造的問題と効果的授業構築」(『学習者中心の外国語教育をめざして』[三修社, 2004年] 87ページ～104ページ) 参照。ここで、山本氏は、新修外国語の学習においては、文法項目や使用単語を適切に選択・精選し、段階的に無理なく習得できるよう配列することが、学習者のモチベーションを高める有力な手段の一つであることを、自分の実践を通して、力説している。

(2005年4月15日受理)